

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13450

研究課題名(和文) 2次述語の意味と構造

研究課題名(英文) The Meaning and Structure of Secondary Predicates

研究代表者

芝垣 亮介 (Shibagaki, Ryosuke)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：70631860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：当初4年を計画していた本研究は、コロナウィルス蔓延の影響のため、計画していた海外での研究調査が行えず、研究計画に修正を加え、また2020年度の研究費を翌年に持ち越すために一年間期間を延長して研究を行なった。結果としては、オンラインではあるが、国際ワークショップにおいても発表をし、国際共同出版という形で研究成果を刊行できることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前述の刊行物は、De Gruyter Mouton社からMouton-Ninjal Library of Linguisticsシリーズとして刊行されるものであり、言語学において比較的メジャーなテーマである2次述語について、国内外の同テーマの専門家が最新の研究成果を収めるものであるため、人の言葉の理解というものに貢献したものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research project was originally planned as a 4-year research. However, due to the spread of COVID-19, I could not perform the planned international research trip in 2020. This is why, I revise the concrete research plan slightly and made it a 5-year research to utilize the research funding of 2020.

As a result, I joined the international workshop, though it was online. I had some internal research investigation. These led to such achievement as the international publication of a book.

研究分野：言語学

キーワード：語彙意味論

1. 研究開始当初の背景

2017年度に開始した本研究の背景を説明する。報告者が本科研において研究テーマとしたのは「2次述語の意味と構造」である。この2次述語というのは理論言語学の中でも統語論や意味論の研究分野では比較的メジャーな分野であり、先行研究も多数存在し、多くの言語で観察される言語現象である。実態としては、多くの言語で観察されるにも関わらず、その分析は、各言語に固有の解決を見ており、より人間の言語の産物としての2次述語の分析を行う必要があった。

また、報告者は以下の「目的」で後述の通り、対照言語として中国語を選択した。この中国語の2次述語の分析は1990年代より盛んに行われており、特にLi(1990, 1995, 1999)、Huang(2006)、Her(2007)などはベンチマークとなっている。しかしながら、報告者が既に指摘の通り、これらの先行研究は、中国語の2次述語のある言語事実を捉えてない、分析が中国語の2次述語にのみ当てはまるものであり、言語事実を分析したというより、当てはまるように理論を修正したという方が適切な状況であった。

報告者自身も2010年より、同テーマを扱ってきたが、その分析では一定の成果を収めてきたものの、改良の余地が残されていた。

報告者自身の所属先という意味での背景として、報告者は2017年9月から2018年8月までマサチューセッツ工科大学(MIT)に一年間サヴァティカルで所属することが決まっており、同大学および、隣接するハーバード大学にて研究調査ができることとなっていた。これらの大学には理論言語学者および中国語が母語話者である言語学者が多数所属しており、中国語の2次述語を研究するのに適した環境であった。

2. 研究の目的

報告者は、2次述語を分析するにあたり、その対象言語の中心を中国語に据えた。これは以下の2点の理由からである。第一に、中国語の2次述語の分析に決着を見ていないということが挙げられる。前述の背景の通り、中国語の2次述語の先行研究は豊富だが、一貫した解決方法は見られず、また、報告者が指摘の言語事実を説明できる理論が存在していない。これを最新の言語理論を用いて、分析し、その「リンキング」と呼ばれる叙述現象を解明することが本研究の目的の柱の一つである。

第二に、中国語の2次述語は、統語的に特異な振る舞いをするので、それを分析することで、2次述語や、その周辺的な言語事実(項構造や格の問題など)を側面を分析することができ、総合的に言語学の理論にフィードバックをすることも目的の一つとして挙げられる。

3. 研究の方法

研究の方法として、先行研究を再確認し、同分野について知見のある専門家と意見交換をすることで始めた。具体的にはハーバード大学の教授と何度も意見交換をし、報告者自身の先行研究について指摘を受けただけでなく、その後方向性について助言をいただいた。

またMITでは上海語の母語話者である言語学者と意見交換を行い分析を行なった。上海語は、音韻的に簡略化されていない中国語であり、それゆえ、音韻的簡略化に伴う統語的変化を経っていない言語である。中国語の2次述語はその根幹部分においてこの統語的変化の影響を受けており、現代中国語と上海語を比較することにより、現代中国語の統語構造のあるべき方向性を見出すことができた。

データはマサチューセッツ工科大学(米国)や香港中文大学(香港)、日本の各地でも収集し直し、各所で発表を重ね、世界で活躍する理論言語学者や中国語の母語話者である言語学者と意見交換をすることで、偏りのない研究を目指した。

4. 研究成果

研究成果として、マサチューセッツ工科大学、香港中文大学、東北大学にて発表をしたことが挙げられる。これらの発表は全て招待講演となっており、1時間から1時間30分の発表であったため、その内容について十分に説明することが可能であり、また意見交換も余裕を持って行えた。研究成果の中心として次の刊行物が挙げられる。Mouton-Ninjal Library of Linguistics シリ

ーズより発刊される最新の 2 次述語研究を収めた本より、報告者の研究成果である「The causation of meaning of Mandarin Secondary Predication」が発表される。これは国内外の 2 次述語の専門家が集まり、二年間かけて発表や意見交換を行い、その成果をまとめたものである。最新の言語理論を用いた最新の 2 次述語研究の集約本である。報告書で後述の通り、他にも著書 2 点が成果物として挙げられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ryosuke Shibagaki	4. 巻 48
2. 論文標題 Between Language Education and Linguistic Theory: Suffixes and their Semantic Distribution	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Ryosuke Shibagaki
2. 発表標題 Mandarin Secondary Predicates
3. 学会等名 Secondary predication workshop（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 芝垣亮介
2. 発表標題 中国語の結果を表す連動詞の意味と構造
3. 学会等名 東北大学言語学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芝垣亮介・小泉政利
2. 発表標題 Q-particles and Q-dropping
3. 学会等名 関西レキシコンプロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryosuke Shibagaki
2. 発表標題 Mandarin Resultatives in Syntax-Semantics Interface
3. 学会等名 Syntax Square
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Ryosuke Shibagaki
2. 発表標題 The Property of Mandarin Resultatives in Syntax-Semantics Interface
3. 学会等名 多泰中國語文研究中心 語言學講座（招待講演）
4. 発表年 2018年～2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 H. Kishimoto, M. den Dikken, M. Kawashima	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 236
3. 書名 Mouton-Ninjal Library of Linguistics	

1. 著者名 于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂・漆原朗子・小野尚之・工藤和也・芝垣亮介・田中秀和・中谷健太郎・ブラシャント パルデン・トマ ペラルル・宮川繁・由本陽子・他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 373 (pp118-132)
3. 書名 統語構造と語彙の多角的研究（「中国語の結果を表す連動詞の様態について」芝垣亮介）	

1. 著者名 芝垣亮介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 中国語の結果を表す連動詞の様態について	

1. 著者名 Shibagaki, Ryosuke (edt. Piotr Stalmaszczyk)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 pp267-288 (p294)
3. 書名 Grammatical Expression of Tense and its Interpretation in Secondary Predication (in Understanding Predication)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------